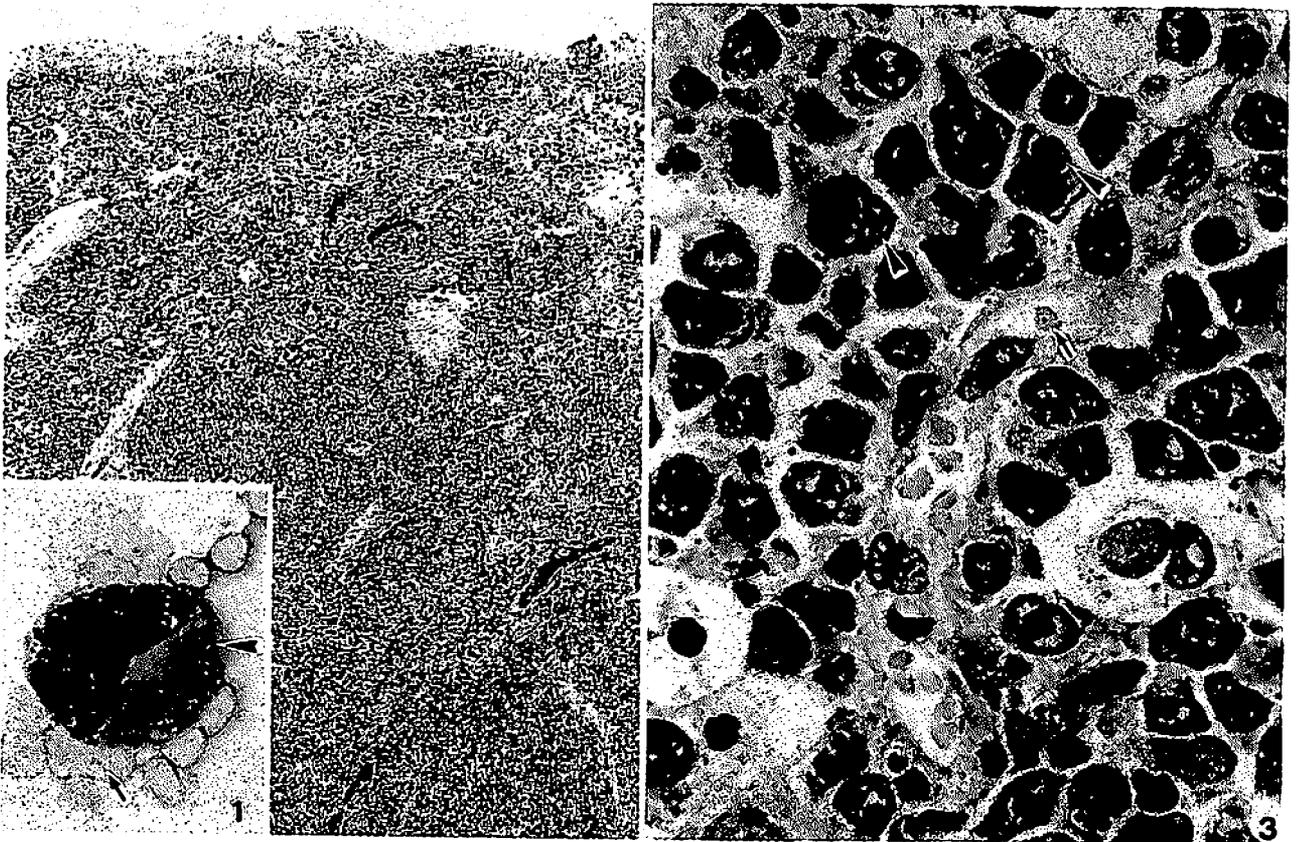


T. parva感染牛のリンパ節

家畜衛生試験場病理第2研究室出題 第23回獣医病理学研修会標本No.387



東沿岸熱 (East Coast Fever) はアフリカ東海岸諸国で猛威をふるっている牛の原虫病で, *Theileria parva* がダニを介して感染し, 牛は重篤な症状を示す。この疾病の解柝は近年精力的に進められており, 原虫の生活環などはかなり詳細につき止められてきた。いまだ不明点が極めて多い *Theileria sergenti* 感染症を追求する上で, 何らかの示唆を与えてくれる疾病ではないかと思われる。

動物: 牛, ボラン種, 雌, 8ヵ月齢。

臨床的事項: 1982年1月6日, 国際動物病研究所 (ILRAD; ケニア) において *T. parva* の感染ダニ10匹分のスポロゾイト浮遊液 (stabilate) 1 ml を上記実験牛の左側耳下腺の下部に皮下接種したところ, 10日後から体温は40°Cを超え, 食欲が無くなり, 続いて横臥し, 接種21日後に死亡した。

剖検所見: 消瘦高度。左側耳下腺リンパ節は著しく腫大し出血を伴っていたほか, ほぼ全身性にリンパ節の腫脹が見られた。一般に脂肪組織の黄色味が強かった。脾臓被膜の軽度の出血と剖面の膨隆, 肺小葉間結合組織の増幅, 小腸漿膜の軽度の点状出血, 第四胃, 小腸および結腸粘膜の充出血がそれぞれ認められた。

生検および血液所見: 左側耳下腺リンパ節および右側浅頸リンパ節の生検 (写真1, 塗抹標本のギムザ染色,

×1000) により, マクロシゾント (矢じり印) はそれぞれ接種後8日および10日から, またミクロシゾントはそれぞれ接種後13日および15日から検出された。頸静脈血の検査により, 赤内型原虫 (写真1, 矢印) は14日後から検出された。

病理組織学的所見: 写真2 (ヘマトキシリン・エオジン染色, ×40) に示すように, 皮質では二次小節の萎縮が著しく, 傍皮質領域における細胞の稀薄化と水腫を伴っていた。主として髄索においては, 大型のリンパ芽球様細胞 lymphoblastoid cells が著しく繁殖し, 数石状配列を示していた。これらの細胞は染色質に富んだ大きな核と, 好塩基性の細胞質をもち, 細胞質内に1個ないし数個のマクロシゾントを含むものが過半数を占めていた。有糸核分裂を示す細胞も散見され, その一部はマクロシゾントを含んでいた。ギムザ染色標本 (写真3, ×1000) ではマクロシゾント (矢じり印) はさらに鮮明に染め出されており, 赤内型原虫 (矢印) も容易に確認された。なおリンパ節以外では, 肺胞隔, 心筋間質, 脾髄などでリンパ芽球様細胞の浸潤や繁殖が認められ, それらの細胞質内にマクロシゾントが確認された。

病理組織学的診断: *Theileria parva* 感染リンパ節炎 (東沿岸熱リンパ節炎)。